

学生生活における充実感の構造分析¹

森 野 礼 一
池 上 知 子

本研究は、大学生活を送る青年の充実感を支えている諸要因を明らかにし、それらの関連構造を探ることを目的としている。

近年、青年心理学の領域で、青年の充実感を研究することが青年期の心理を理解する上で非常に意義深いことであると認められつつある（西平1973, 1979, 大野1984）。それは、青年期が自我同一性を確立する時期であり、充実感という感情が、健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情、いわば、健全な自我の実感だからである（大野1984, 西平1979）。しかし、これまでのところ、充実感に関する問題に正面から取り組んだ研究は非常に少い。西平（1979）は、“現代日本青年の心情モデル”を提出し、充実感がその青年の信頼感情、自立感情、連帯感情によって説明されることを論じた。このモデルによれば、充実感が自我同一性統合の方向と対応し、空虚感是对抗の自我同一性拡散の方向と対応している。大野（1980, 1984）は、青年の充実感を測る尺度を作成し、因子分析を行うことにより、充実感が西平の心情モデルに示されるような構造になっていることを実証的に検討している。これらの研究は、充実感を中心とした青年の種々の生活感情の関連構造を明らかにした点で大きな意味があるといえよう。しかしながら、そこで論じられてきたのは、抽象的な感情と感情の関連性であり、そうした感情がその青年の日常生活での態度や行動の様相とどのようにかかわり合っているのかという点は、追究されていない。青年心理の特質をより深く理解するためには、内面的な感情世界と外側にあらわれる生活態度や行動とのあいだにある有機的な関係を明らかにすることが必要と思われる。

本研究では、こうした問題意識から、とくに、大学に学ぶ青年の充実感が、学生生活の諸側面におけるあり様とどのようにかかわっているかを検討する。大学に学ぶ青年にとっては、学生生活こそが自我同一性（アイデンティティ）を形成する最大の拠りどころであろう。従って、学生生活を充実感をもって過ごしているか否かは、その学生が健康な自我を統合し確立しつつあるかどうかを知る重要な鍵になると思われる。本研究では、学生生活の諸側面、勉学生活、クラブ生活、アルバイト及び経済生活、また進路問題への取り組み等を把握し、それらと充実感がどのようにかかわっているかを明らかにしたい。大学生の充実感を支えているものが何であるかを知るとは、社会へ出るための準備期にある彼らが何を求めているのかを理解することを意味しており、教育的意義も大きいといえる。方法としては、学生生活の種々の側面にわ

1 本研究は、神戸女学院大学研究所から研究助成金を受けて行われたものである。同研究所所長の池井望教授をはじめ、研究所委員の先生方並びに職員の皆様に心より感謝いたします。

たる質問項目を作成し、それらに対する反応と充実感に関する質問項目に対する反応を、数量化Ⅲ類によって分析する。

方 法

(1)調査項目の作成

学生生活の実態を把握するために行われた神戸女学院大学学生相談室の調査の一部を利用した。この調査は、136個の質問項目から成り、その概要は表1に示した。項目作成にあたっては、津田塾大学学生生活課（1978, 1980）の行った学生生活実態調査で用いられた項目を参考にし、かつ本学の独自性を考慮した。

表1 調査項目の概要

| | | |
|------------------|-------------------------|------|
| I. 基本項目 | 学科, 学年, 出身校等…………… | 7項目 |
| II. 大学進学 | 志望大学, 入学理由等…………… | 6項目 |
| III. 学生生活 | (1)全体イメージ…………… | 11項目 |
| | (2)勉学について…………… | 5項目 |
| | (3)クラブ, 同好会について…………… | 7項目 |
| | (4)アルバイト及び経済生活について…………… | 8項目 |
| | (5)住居について…………… | 7項目 |
| | (6)習いごと, 趣味, 娯楽…………… | 11項目 |
| IV. 不安・悩み | (1)能力, 性格について…………… | 2項目 |
| | (2)対人関係について…………… | 2項目 |
| | (3)進路, 就職について…………… | 7項目 |
| | (4)相談…………… | 3項目 |
| V. 適応度診断テスト…………… | | 60項目 |

(2)調査の期日

調査は、1984年10月8日～31日にかけて実施した。

(3)調査の対象

神戸女学院大学の学生（1年～4年）1768名

(4)調査の手続き

後期授業登録日である10月8日、9日の両日に、質問票（冊子形式）と回答用紙を全学生に配布し、学生自身に記入してもらい、当日中に回収した。当日、実施、回収できなかった学生は、学生番号を掲示して呼び出した。最終的に1768名の回答が得られ、回収率は全体で89.3%であった。質問はいずれも多肢選択形式で、回答はマークシートに記入させた。回答用紙には、全員氏名と学生番号を記入させた。尚、本研究では表1に示された調査項目のうち、勉学について（Ⅲ—(2)）、クラブ同好会について（Ⅲ—(3)）、アルバイト及び経済生活について（Ⅲ—(4)）、及び進路・就職について（Ⅳ—(3)）尋ねた項目を中心に分析を行っている。データの分析には、京都大学大型計算機センターにあるSPSS統計パッケージ（HAYASI3）を使用した。

結果と考察

(1)勉学生活と充実感の構造分析

充実感についての質問項目は表2に示す通りである。また、勉学生活については、5つの質問を用意し、講義への出席、講義内容に対する理解や興味、試験や卒論に関する不安、勉学内容に対する満足感について回答を求めた。質問項目の一覧は、表3に示した。充実感についての質問項目と勉学生活にかかわる項目を合わせて、数量化Ⅲ類により26個の反応のパターン分類を行った。充実感との関連をとらえやすいように、Ⅰ軸とⅡ軸についてプロットして得られた布置が図1である。まず、右下方部に、学生生活が非常に充実している(19—1)、講義はよくわかり(26—4)、大いに興味もある(27—4)、本学での勉学内容に非常に満足している(29—1)、試験卒論に対して全く不安はない(28—1)といった反応項目が互いに近接し一つのクラスターをなしているのが認められる(Aグループ)。そして、右上方部には、学生生活がとても不満である(19—5)、興味のもてる講義がほとんどなく(27—1)、できれば他の大学にかわりたい(29—5)、講義は出席していないものが半分くらいある(25—2)といっ

表2 充実感に関する質問項目

-
- 19 現在のあなたの学生生活の充実度(満足度)について答えて下さい。
1. 非常に充実している 2. 一応充実している
 3. とくに不満はないが、充実しているともいえない
 4. やや不満である 5. とても不満である
-

表3 勉学生活に関する質問項目一覧

-
- 25 講義への出席について、答えて下さい。
1. ほとんど出席していない 2. 出席しないものが半分くらいある
 3. 各位出席している 4. ほとんど出席している
- 26 講義内容の理解について、答えて下さい。
1. ほとんどわからない 2. わからないものがかなりある
 3. わからないものが少しある 4. よくわかる
- 27 講義に対する興味について、答えて下さい。
1. 興味のもてるものがほとんどない
 2. 興味のないものがかなりある 3. 興味のないものが少しある
 4. 大いに興味がある
- 28 試験・卒論に関してどの程度、不安や悩みを感じていますか。
1. 全く不安はない 2. 少しは不安である
 3. かなり不安である 4. 非常に不安である
- 29 本学での勉学(専攻)内容に対する満足度について答えて下さい。
1. 非常に満足している 2. 一応満足している
 3. 不満はあるがしかたがない
 4. できれば、他の学部・学科にかわりたい
 5. できれば、他の大学にかわりたい
-

た反応項目が一つのクラスターをなしている（Bグループ）。充実度において極端な値を示したAグループとBグループが、縦軸（Ⅰ軸）に沿って遠く離れて位置し、両者のあいだに中間群が位置している。細かくみれば、その中間群もまたいくつかのグループに分けられる。Aグループの左上方に、学生生活は一応充実している（19—2）、興味のない講義が少しはあるが（27—3）、本学での勉学内容に一応満足し（29—2）、また、試験卒論に対する不安はあっても比較的少ない（28—2）、講義にはほとんど出席している（25—4）といった反応グループが位置し（Cグループ）、その上方に、学生生活に不満はないが充実しているともいえない（19—3）、講義のなかにわからないものが少しあり（26—3）、本学での勉学内容に不満はあるがしかたがないと考えており（29—3）、講義へは2/3位出席している（25—3）、試験卒論に対する不安はかなりある（28—3）、といった反応項目がまとまりをなしている（Dグループ）。さらに、その上方には、学生生活はやや不満である（19—4）、講義のなかにはわからないものや興味のないものがかなりある（26—2、27—2）、できれば他の学部や学科に変わりたいと考えており（29—4）、また、試験や卒論に対しては非常に不安を感じている（28—4）といったグループの存在が認められる（Eグループ）。全体的布置から読みとれることは、Ⅰ軸（縦軸）において、勉学内容に対する満足感と学生生活の充実度の高低、即ち満足感を表明した者から不満感を表明した者までがその程度に応じて分離、識別されていること、Ⅱ軸（横軸）においては、肯定的であろうと否定的であろうと、とにかく勉学内容に対する自我関与が高いか低いかで識別されていることである。これは、勉学生活と充実感の関係が1次元的なものでなく、2次元的な構造をなしていることを意味している。とくに、Ⅱ軸によって、勉学内容に関して強い“こだわり”をもつ少数派と、多少の不満はあっても適当に処理して現実的に適応している多数派が対比的にとらえられている点は興味深い。「学問の場」であったはずの大学が急激にその質を変えつつある昨今の風潮と少なからず関係しているようにも思われる。しかしながら、やはり全般的には、学生生活における充実感と勉学内容に対する満足度は密接に対応しているようである。勉学内容におおいに満足している学生は、本学での勉学が能力的に合っており、そして何よりも、内容に積極的な興味を抱いていることがわかる。逆に、勉学内容に積極的な興味をもてなくなるほど、自分の能力とのズレが大きくなるほど、不満感は強まるようである。ただし、講義が全くわからない（26—1）という反応は、いずれのグループからも大きくはずれて位置していることから、学業面での“落ちこぼれ”的存在は、本学ではきわめて稀なケースと考えられる。また、学生生活に一番強い不満を表明し、他大学に変わりたいというBグループの学生は、能力的なズレというよりは、あくまでも内容に対して興味をもてないというのが最大の理由といえよう。講義への出席率は全体的に高いために、心理的充実感を必ずしも反映していない。むしろ、一部の学生は、講義内容に不満はあっても、試験に対する不安から比較的まじめに出席していることがうかがわれる。

(2) クラブ生活と充実感の構造分析

クラブ生活についての質問項目は7個用意し、クラブ・同好会への所属の有無、活動日数、活動への参加度、活動に対する満足度、入部入会の動機などについて回答を求めた。質問項目の

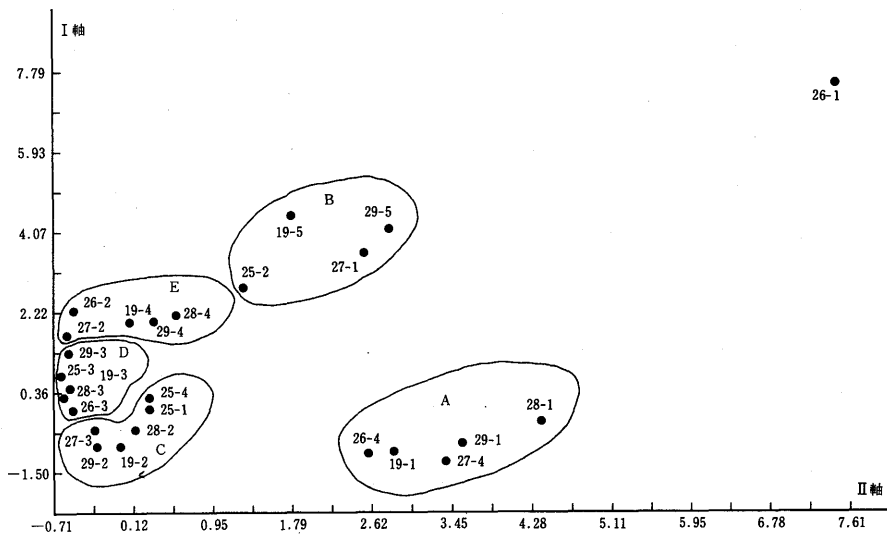


図1 勉学生活と充実感の構造分析

一覧は表4に示した。これらクラブ生活に関する7項目に充実感に関する質問項目(表2)を加えて、計26個の反応のパターン分類を行った。充実感の構造を比較的とらえやすいI軸(縦軸)とV軸(横軸)についてプロットして得られた布置を図2に示した。まず、I軸(縦軸)によって、クラブ・同好会に所属している群と所属していない群が大きく分離されている。そして、V軸(横軸)に沿って、クラブや同好会に所属している人たちの活動への関与のし方の質の違いと心理的満足感との関係がとらえられている。まず、一番左端に、クラブのみに所属し(30—2)、活動日はほぼ毎日(32—1)、活動にはほとんど参加している(33—1)、活動にはおおいに満足している(34—1)、自分の好きなことがやれるから入部した(35—1)、学生生活は非常に充実している(19—1)といった反応項目が一つのクラスターを形成し、内発的動機に支えられ、クラブ活動に専念することで充実感を得ているグループの存在が認められる(Aグループ)。その右隣りに、クラブと同好会の両方に所属している(30—1)、活動日は週2～3日(32—2)あるいは週に1日(32—3)、時々活動に参加しないことがある(33—2)、活動には一応満足している(34—2)、入部入会の動機は、友だちが作れるから(35—2)、何となく人に誘われて(35—4)、学生生活は一応充実している(19—2)、といった反応項目が互いに近接して位置している。これは、友だちづき合いの一環として広く浅くクラブや同好会にかかわり、適当に楽しんでいるグループと考えられる(Bグループ)。さらにその右隣りに、同好会に所属している(30—3)、活動に対しては少し或いはかなり不満である(34—3, 34—4)、あまり活動に参加していない(33—3)、他大学との交流があるから入会した(35—3)、学生生活はとくに不満はないが充実しているともいえない(19—3)といった反応項目がまとまっている(Cグループ)。同好会派は、活動自体に積極的な意味を見出すことなく、漫然と所属しているだけといった感が強い。これらA, B, C3グループの上方に、クラブにも同好会にも所属していない無所属派が位置している(Dグループ)。このグループは、学生生活への不満感がかなり強いようである。さらに細かくみると、無所属派グルー

表4 クラブ・同好会に関する質問項目一覧

- 30 クラブまたは同好会に所属していますか。
1. クラブと同好会の両方に所属している
 2. クラブに所属している
 3. 同好会に所属している
 4. クラブにも同好会にも所属していない

■クラブまたは同好会に所属している人 (30で1～3と答えた人) にお尋ねします。
(2つ以上かけもちの人は主たるものについて答えて下さい)

- 31 どんなクラブや同好会に所属していますか。
1. 文化系
 - 体育系

- 32 活動日について答えて下さい。
1. ほぼ毎日
 2. 週に2～3日
 3. 週に1日
 4. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入

- 33 あなたの参加度について答えて下さい。
1. 活動にはほとんど参加している
 2. 時々活動に参加しないことがある
 3. あまり活動に参加していない

- 34 活動に対する満足度について答えて下さい。
1. おおいに満足している
 2. 一応満足している
 3. 少し不満である
 4. かなり不満である

- 35 入部・入会の動機について答えて下さい。
1. 自分の好きなことがやれるから
 2. 友だちが作れるから
 3. 他大学との交流があるから
 4. 何となく、人に誘れて
 5. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入

- 36 クラブにも同好会にも所属していない人 (30で4と答えた人) は、その理由を1つ答えて下さい。
1. 忙しくてクラブ・同好会に入る余裕がない
 2. クラブ・同好会に入ると拘束されるので
 3. 自分に合ったクラブ・同好会がないから
 4. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入

プ内でも、所属しない理由として、忙しくてクラブ同好会に入る余裕がない(36—1)と答えている者と、クラブ・同好会に入ると拘束されるので(36—2)とか自分に合ったクラブ・同好会がないから(36—3)と答えている者との相互に分離しているのがわかる。どちらかといえば、後者の方が学生生活への不満はより強いといえる。これらのことから、クラブ生活と充実感の関係について推察できることは、自分の好きなこと、やりたいことが明確であり、そうした内発的な興味や動機に支えられて、クラブ活動に積極的に関与することが、学生生活の充実感を高める重要な要因だということである。逆にいえば、自己のエネルギーを積極的に投入

する対象を見出し得ないでいることが、学生生活における不満感をつのらせる原因だと考えられる。また、クラブ活動を通じて友だちとの交流がもてるということは、ある程度、充実感を高めることに寄与しているが、やはり、それは副次的であり、活動自体に対する満足感が最重要と思われる。

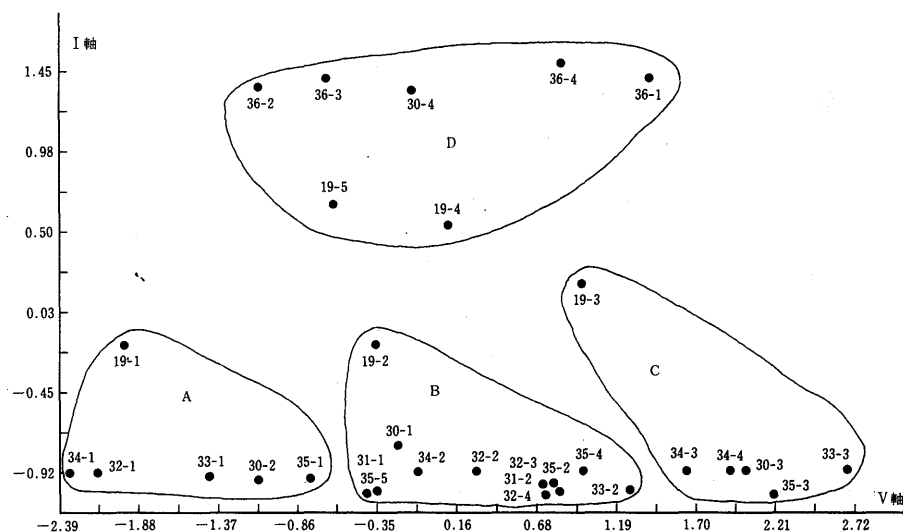


図2 クラブ生活と充実感の構造分析

(3) アルバイト及び経済生活と充実感

アルバイト及び経済生活に関する質問項目を6つ用意し、どの程度アルバイトをやっているか、アルバイトに対する不満、経済上の悩み等について尋ねた。質問項目の一覧は、表5に示した。これらの項目と充実感に関する項目(表2)とを合わせて、計26個の反応のパターン分類を行った。図3に、充実感との関連がとらえやすいI軸とⅢ軸についてプロットして得られた布置を示した。左上方部に、現在やっているアルバイトはかなり不満である(41—4)、アルバイトの仕事の内容が自分に合っていない(42—4)、アルバイトする必要があるのに適当なものがみつからない(44—1)、学生生活はととても不満である(19—5)、といった反応項目がまとまりをなしている(Aグループ)。そしてその右隣りに、アルバイトに少し不満である(41—3)、アルバイトの報酬が悪い(42—1)、経済上のことで少し悩んでいる(43—2)、学生生活は少し不満である(19—2)、といった比較的軽度の経済的悩みをかかえるグループが位置している(Bグループ)。また、Aグループの下方に、アルバイトは経済的にはあまり必要としないがやりたい(37—3)、アルバイトは休暇中などに集中してやるが定期的にはやっていない(38—3)、必要に応じて時々やるぐらい(38—4)、アルバイトに何らかの不満はある(42—5)、学生生活はとくに不満はないが充実しているともいえない(19—3)といった反応項目が互いに近接してまとまりをなしている(Cグループ)。これは、アルバイトにとくに積極的な価値を見出ししているわけでもないが、強い不満があるわけでもない“適当派”といったところであろう。その右隣りに、基本生活はやってゆけるが特別の目的のためにアル

表5 アルバイト及び経済生活に関する質問項目一覧

- 37 アルバイトは、あなたにとってどのくらい必要ですか。
1. アルバイトをしないと経済的に苦しい
 2. 基本生活はやってゆけるが特別の目的（旅行・習いごと・耐久消費材の購入など）のために必要
 3. 経済的にはあまり必要としないが、やりたい
 4. 経済的には必要でないし、とくにやりたいとも思わない

■現在アルバイトをやっている人にお尋ねします。

- 38 どの程度やっていますか。
1. 学業に支障があるが定期的に毎月
 2. 学業に支障がない程度に定期的に毎月
 3. 休暇中などに集中してやるが定期的にはやっていない
 4. 必要に応じて時々やるぐらい
 5. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入

- 41 現在やっているアルバイトに対する満足度について。
1. おおいに満足している
 2. 一応満足している
 3. 少し不満である
 4. かなり不満である

- 42 現在やっているアルバイトの不満な点は、下記の中のどれですか。
1. 報酬が悪い
 2. 時間的拘束が大きい
 3. 心理的負担が大きい
 4. 仕事の内容が自分に合っていない
 5. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入
 6. 特になし

■全員にお尋ねします。

- 43 経済上のことで、どの程度不安や悩みを感じていますか。
1. とくに悩んでいない
 2. 少し悩んでいる
 3. かなり悩んでいる

- 44 43で2, 3と答えた人は、その理由を1つ答えて下さい。
1. アルバイトをする必要があるのに、適当なものがみつからない
 2. 奨学金を受けたいのだが、受けられない
 3. 家庭が経済的に苦しい状態にある
 4. その他 (~~~~~)
↳別紙に記入

バイトは必要 (37-2), アルバイトを学業に支障のない程度に定期的に毎月やっている (38-2), 時間的拘束が大きい (42-2), 心理的負担が大きい (42-3), といった不満はあるが、現在やっているアルバイトに一応満足している (41-2), あるいは、とくに不満もなく (42-6), アルバイトにおおいに満足している (41-1), また経済上のことでもとくに悩んでいない (43-1), 学生生活は一応充実している (19-2), といった反応項目が集まっている (Dグループ)。比較的健全な形でアルバイトを学生生活の中に位置づけているグルー

プと考えられる。このDグループの右上方に、アルバイトをしないと経済的に苦しい(37-1)、学業に支障があるが定期的に毎月やっている(38-1)、経済上のことでかなり悩んでいる(43-3)、その理由として、奨学金を受けたいのだが受けられない(44-2)、家庭が経済的に苦しい状態にある(44-3)といった反応項目が散布しており、少数ではあるが、深刻な経済的悩みをかかえる学生が存在することを示唆している(Eグループ)。また、アルバイトは経済的に必要でないしとくにやりたいとも思わない(37-4)と、学生生活は非常に充実している(19-1)、という2つの項目は、A~Eのいずれのグループからもかけ離れて、それぞれ単独で位置している。さて、布置全体から読みとれることは、アルバイトから得られる満足感や経済的安定は、学生生活を一応充実させることに寄与してはいるが、非常に充実させるためには、別の何かが必要であるということであろう。また、アルバイトをめぐる不満と経済上の悩みは、それぞれ学生に与える心理的影響の質が異なり、両者は次元の異なる問題だと考えられる。そして、アルバイトをめぐる不満のなかでは、仕事の内容が自分に合っていないとか、自分に合ったアルバイトが見つからないというのが最も強い心理的ストレスを生み出すようで、仕事がハードであるとか、報酬が悪いといったようなことはそれほど深刻ではない。やはり、アルバイト生活においても、自分がそれに積極的に打ちこめるかどうかという問題が、充実感と密接にかかわっているといえよう。

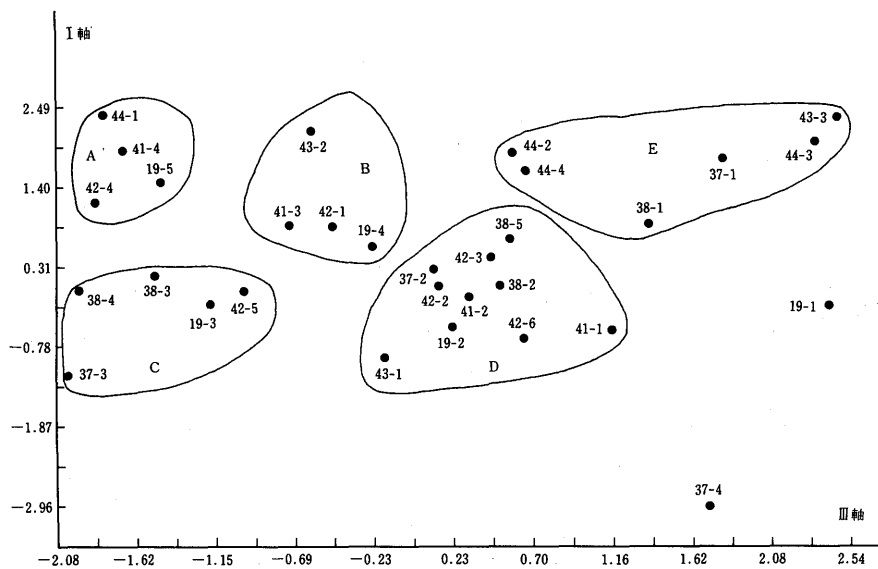


図3 アルバイト及び経済生活と充実感の構造分析

(4)進路・就職問題と充実感の構造分析

進路・就職問題に関する質問は5個用意し、進路・就職に関して何か不安や悩みを感じているか、自分がどのような進路に適しているか自信があるか、専攻が進路に生かせると思っているか、準備活動の状況、家族の態度などについて尋ねている。質問項目の一覧は表6に示した。これらの質問項目と充実感に関する質問項目を合わせて、計22個の反応を数量化Ⅲ類によって分析した。充実感との関連構造が把握しやすいように、I軸(縦軸)とII軸(横軸)について

表6 進路・就職に関する質問項目一覧

- 67 あなたは、現在、進路・就職について何か不安や悩みを感じていますか。
 1. 特に悩んでいない 2. 少し悩んでいる 3. とても悩んでいる
- 69 あなたは、自分がどのような進路に適しているか、自信がありますか。
 1. かなり自信がある 2. 少しは自信がある
 3. あまり自信がない 4. 全く自信がない
 5. 特に考えたことがない
- 70 あなたは、自分の専攻が今後の進路に生かせると思いますか。
 1. かなり生かせる 2. 少しは生かせる
 3. あまり生かせない 4. 全く生かせない
 5. とくに考えたことがない
- 71 家族（両親など）は、あなたの希望する進路に賛成してくれていますか。
 1. おおいに賛成している 2. 一応賛成している
 3. 何も言わない 4. 少し反対している
 5. 非常に反対している
- 72 あなたは、自分の進路・就職のために、準備していますか。
 1. 現在、準備活動をしている
 2. 準備しようと思っているが、まだ始めていない
 3. 準備したいが、どうしてよいかわからない
 4. 特に考えていない

プロットしたのが図4である。まず、I軸によって、進路・就職に関する不満の程度と充実感との対応関係をとらえることができる。左下方部に、自分がどのような進路に適しているかかなりの自信がある（69—1）、専攻が今後の進路にかなり生かせる（70—1）、家族（両親など）も自分の希望する進路におおいに賛成している（71—1）、進路・就職のために現在準備活動をしている（72—1）、学生生活は非常に充実している（19—1）といった反応項目が集まっているのがわかる（Aグループ）。目指したいことがはっきりしており、現在やっていることとの間に矛盾がない、いわば目標に向かって着々と歩んでいるかのようなグループである。その上方に、進路・就職について少し悩んでいる（67—2）、専攻が進路に少しは生かせる（70—2）、家族も自分の希望する進路に一応賛成している（71—2）、進路・就職のために準備しようと思っているがまだ始めていない（72—2）、自分がどのような進路に適しているか少しは自信がある（69—2）、学生生活は一応充実している（19—2）、といった反応項目がまとまりをなしている（Bグループ）。将来に対しある程度の見通しをもっているが、多少の迷いがあり最終的な決定を保留しているグループとみなせる。そしてその上方に、進路・就職に関する矛盾や葛藤を示す反応項目が集中している。その大きなまとまりも、矛盾や葛藤の程度によって2分できる。まず、自分がどのような進路に適しているかあまり自信がない（69—3）、専攻が今後の進路にあまり生かせない（70—3）、家族が自分の希望する進路に少し反対している（71—4）、学生生活はとくに不満はないが充実しているともいえない（19—3）、やや不満である（19—4）といった反応項目でまとめられる（Cグループ）。進路に関して少な

からず悩んでおり、それが学生生活への不満につながっているグループである。またその上方にある、進路・就職についてとても悩んでいる（67—3）、専攻が今後の進路に全く生かせない（70—4）、自分がどのような進路に適しているか全く自信がない（69—4）、進路・就職のために準備したいがどうしてよいかわからない（72—2）、家族は自分が希望する進路に非常に反対している（71—5）、家族は何も言わない（71—3）、学生生活はととても不満である（19—5）といった反応項目で一つのまとまりがつかれる（Dグループ）。進路・就職をめぐる強い葛藤があり、悩み苦しんでいるグループと考えられる。これらⅠ軸に沿って識別されたA、B、C、Dのグループのいずれからも離れた右の方に、進路・就職について特に悩んでいない（67—1）、自分がどのような進路に適しているか特に考えたことがない（69—5）、専攻が今後の進路に生かせるか特に考えたことがない（70—5）、進路・就職のための準備についても特に考えていない（72—4）などの反応項目が散布しており、進路・就職に関する問題意識の希薄なグループ（Eグループ）の存在を示している。つまり、Ⅰ軸が進路問題をめぐる悩みの度合いをとらえているのに対し、Ⅱ軸は、そもそも進路・就職について問題意識が有るのか無いのかを識別している。全体的にみれば、将来への見通しがあり、現在の学生生活を充実して送っているグループ、将来に対して迷いや葛藤があって、現在の学生生活に適応できないグループ、そして、進路・就職の問題を自分の将来の問題として切実に受けとめていない、現在の学生生活とは無関係なことのようになっているグループ、といった進路問題に関する意識の質の異なる三つのグループに区分できる。これらの結果から推察できることは、自分がどのような進路に適しているか自信があること、現在の専攻内容が進路に生かせるという確信があること、現在自分のやっていることが自分の将来につながっていると実感できることが、充実感を高める重要な要因であるということである。逆に、現在やっていることが自分の将来にどのように結びつくのかわからないといった不安が、一番学生を悩み苦しめるようだ。しかし、

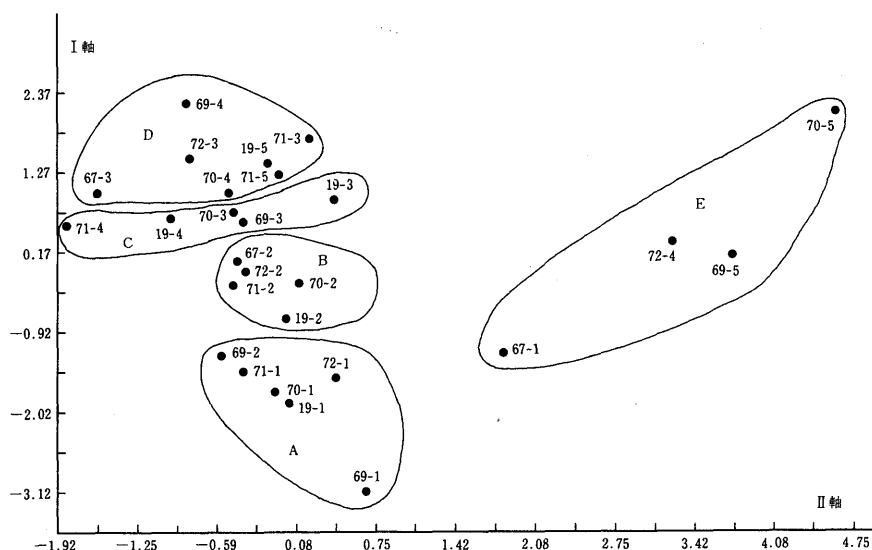


図4 進路・就職問題と充実感の構造分析

人格発達の立場から考えれば、こうした悩み苦しみは、次の段階へ飛躍するための精神的バネになるといえる、むしろ、そうした悩み苦しみを全くもたない学生にこそ、より憂慮すべき問題が潜んでいるように思われる。

総合考察

学生生活の種々の側面のなかで、充実感との対応が明確であったのが、勉学生活と進路問題に対する態度、そしてクラブ生活であった。これに対し、アルバイト及び経済生活との対応はそれほど明確ではなかった。また、本論文では言及しなかったが、習いごとと充実感とのあいだにも明確な関係は見い出されていない。質問票のなかで、現在の学生生活で一番の心のはりあい（楽しみ）となっているものを尋ねているが、それと充実感との関連についてクロス表分析を行った結果が表7である。これをみると、講義やゼミに出席することや、クラブ・サークルでの活動を一番の心のはりあいだと答えている学生の約7割が、学生生活は充実していると感じているのに対し、アルバイトや習いごとが一番の心のはりあいとした学生は、充実していると回答している者が5割に満たないことがわかる。勉学内容やクラブ活動に対する満足度が、充実感に大きく寄与していることがうかがわれる。一方、アルバイトや習いごとを通じて得られる心理的満足は、充実感に寄与する度合いが相対的に小さく、むしろ、これらに楽しみを見い出そうとすることは、大学生生活への不満の裏返しとなっている場合が少なからずあるようだ（ $\chi^2_{(36)}=189.39$, $p<.001$ ）。

表7 学生生活における一番の心のはりあいと充実感

| 1 番の心の はりあい 充実感 | 講 義 ゼ ミ | でサ クの ーラ 活 動 ル・ | 学 友 交 と 流 の | ト ア ル バ イ | 習 い ご と | 趣 味 ・ 娛 楽 | 異 性 と 愛 の | 特 に な し |
|-------------------------|------------------|--------------------------------|----------------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|------------------|
| 1. 非常に充実 | 10.6% | 14.4% | 6.3% | 2.3% | 6.0% | 3.7% | 14.5% | 0.0% |
| 2. 一応充実 | 62.1% | 54.4% | 50.3% | 40.9% | 40.0% | 34.8% | 36.8% | 13.8% |
| 3. 特に不満はないが充実しているともいえない | 19.7% | 21.6% | 34.3% | 36.4% | 28.0% | 42.9% | 30.3% | 55.2% |
| 4. 少し不満 | 7.6% | 8.4% | 7.4% | 15.9% | 18.0% | 14.7% | 14.5% | 24.1% |
| 5. とても不満 | 0.0% | 1.3% | 1.9% | 4.5% | 8.0% | 4.0% | 3.9% | 6.9% |
| TOTAL | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% | 100.0% |

さて、全体を通していえることは、学業であれ、クラブ活動であれ、学生自ら積極的にかかり、打ちこめる対象があるということ、しかもそれが内発的興味や動機に支えられていることが、充実感を高める最大の要因だということであろう。さらに、学生自身に何らかの人生目標、あるいは未来への展望があり、現在やっていることが将来の自分につながっていくという実感がもてることも充実感を高める重要な要件といえる。大野（1984）は、充実感を構成している要素のなかに、西平の心情モデルでいう自立、連帯、信頼の他に、とくに、自分の生き方に対する自信や将来への展望が内包されていることを述べているが、本研究の結果は、これに

符合しているように思われる。本研究では、充実感という感情が、学生の学業やクラブ活動などでのあり方に反映されることが明らかになったが、今後は、心情モデルで記述される感情世界と学生生活の種々の様相との詳細な対応関係を検討すべきであろう。また、勉学生生活やクラブ生活、及び進路問題のいずれの構造分析においても、何か強く情緒的に関与する対象があってそれを通じて満足を得ている群と、それをめぐって不満、葛藤を抱えている群、そして、そもそも自我関与する対象をもたない問題意識の希薄な群と、3つの学生群像が浮かび上がってきている。これらのうち、アイデンティティの確立をめぐって心理的危機が表面化しているのは、やはり、第2のグループであろう。大学の大量化に伴い、学問を通じて自分というものを見つめ直すといった真摯な姿勢を前面に押し出す学生はめっきり減り、「軽さ」「明るさ」が現代学生の特徴といわれる。しかし、物質的に恵まれ、学業もクラブもレジャーも適度にこなし、学生生活をエンジョイしている多数派のかげに、真剣に青年期のアイデンティティの問題に悩む少数の学生が、依然として存在することを第2のグループは示している。ただし、ここで忘れてはならないのは、不満や葛藤があり、現在のあり方に問題意識をもつということは、一方に、自分はこうありたい、こうあるべきだという願望や目標があって、そこへ一歩でも近づこうとあがいているのだということである。少なくともそれは、その学生にそれだけの活力があるという貴重な証しといえる。これに対し、第3のグループのように、現実に対し何の問題意識ももたず、しかし決して満たされてもいない、無目的に漫然と過ごしている状況にこそ、もっとも憂慮すべき心理的問題が潜んでいるように思われる。これは、“豊かな”学生生活を楽しみながらも、自己のあり方に対する漠然とした不安にさいなまれている学生の心情を表わしているように思われる。質問紙法による調査では、「特に考えたことがない」としか答えない学生の心の奥底に巣くっているこの漠然とした不安、学生自身も意識化できないでいる心理をとらえることが今後の課題であろう。

参考文献

- 西平直喜 1973 青年心理学 共立出版
西平直喜 1979 青年期における発達の特徴と教育 大田克也(編) 子どもの発達と教育 6 岩波書店 pp. 1—56
大野 久 1980 現代青年の充実感に関する研究(1) 日本教育心理学会第22回総会発表論文集 pp. 548—549
大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 ——現代日本青年の心情モデルについての検討—— 教育心理学研究, 32, 12—21
津田塾大学学生生活課 1978 津田塾生の実像を求めて ——第1回学生生活実態調査報告——
津田塾大学学生生活課 1980 津田塾生の実像を求めて・2 ——第2回学生生活実態調査報告——
原稿受理 1985年11月29日